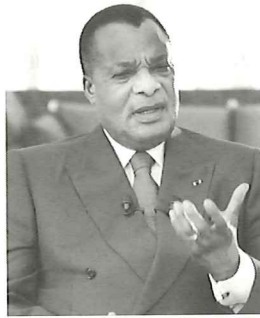


ドウニ・サス＝ンゲソ大統領 ①

2021年3月21日、コンゴで大統領選挙が行われた。現職のドウニ・サス＝ンゲソ大統領 (Denis Sassou-Nguesso) が4選を目指した選挙戦では7人の候補があった。そのなかで現大統領の対抗馬として最も有力視されていたコレラ氏 (Guy-Brice Parfait Kolélas) が選挙中にコロナに感染したことが分かり、体調を崩しパリへ搬送されることになった。もともと選挙前から現大統領の圧勝が予想されていた選挙ではあったが、実際に88.57%の得票率で4選を果たした。アフリカにはカメルーンのビア大統領や赤道ギニアのンゲマ大統領やウガンダのムセベニ大統領など、長期にわたって政権に就く国が少なくないが、サス＝ンゲソ大統領も、これまでの36年間の政権を含めると、これで40年を超えて政権の座に就くことになった。



ドウニ・サス＝ンゲソ大統領

サス＝ンゲソ氏が最初に政権を担ったのは1979年のことである。コンゴ労働党単一政党の時代である。社会主義路線を進めたマリアン・ングアビ大統領が暗殺され、その直後に結成された党軍事委員会の主要メンバーとして政権の中核に身を置くこととなった(2020年3月号)。大統領には同胞のヨンビ＝オパンゴ氏が選出されたが、国の混乱をもたらしたことによって糾弾され、サス＝ンゲソ氏が大統領に就いた。

大統領就任まで

サス＝ンゲソ氏は1943年、コンゴ北部のオヨ (Oyo) の近郊の村で生まれた。小学校時代はオワンド (Owanndo) で過ごすが、56年から60年には南のドリジー (Dolisie) で中学時代を過ごした。当時の彼は学校の先生を目指していたようだ。ところが、1961年には中央アフリカで軍人になるための訓練を受け、翌年にコンゴに帰った彼は、少尉 (sous-lieutenant) となって軍でのキャリアを始めることになる。63年には中尉 (lieutenant) となり、落下傘部隊に配属される。それは、65年にングアビ大統領が組織したコンゴ空軍の最初の落下傘部隊だった。68年から75年にかけて大尉 (capitaine)、少佐 (commandant) そして大佐 (colonel) と順調に軍で昇級していった。

政治面では、1960年代の半ば、ングアビ氏が率いる急進将校 (la mouvance des officiers progressistes) の動きに賛同し、1969年12月31日、マルクス・レーニン主義を唱えるコンゴ労働党 (Parti congolais du travail) の設立メンバーの一人になった。彼はここから政界へと進出していく。とくに1977年、ングアビ大統領の暗殺後に国の政権を握った党軍事委員会 (Comité militaire du Parti) は、憲法の一時停止を宣言し、ヨンビ＝オパンゴ氏を大統領に推挙した。そしてサス＝ンゲソ氏は第一副大統領と党との連携を担う重要なポストに就いた。同時に、国防省のトップとなったのである。

ヨンビ＝オパンゴ大統領就任から1年後の1978年、この両者の対立が表面化する。党を掌握するサス＝ンゲソ氏が有利な立場にあり、ヨンビ＝オパンゴ大統領は党内において少数派と

なり、1979年2月には党軍事委員会によって、委員長の辞任に追い込まれた。それは同時に彼がコンゴの大統領の座からも下りることを意味した。そしてその後サス＝ンゲソ氏が暫定的に委員長に就任して党大会を招集、3月にはコンゴ労働党のトップに選任され、同時に国の大統領に就任したのである。独立以来5代目の大統領の誕生である。任期は5年だった。

大統領就任以降

彼が政権を担った当初、国の経済は危機的な状況であった。それはすでにマサンバ＝デバ大統領時代から続いていたことで、社会主義路線に変わっても経済は好転には向かわなかった。ところが翌年の1980年、経済の中心地であるポワント・ノワール沖で海底油田が発見されたことにより、状況が一転した。独立以来、なかなか手が付けられてこなかった道路や橋、交通手段など都市インフラが整備されていく。さらにまた新たな油田が発見されたことによって、国の歳入は増加し経済は活性化、学生への奨学金制度も生まれた。当時、石油の価格が世界的に高騰していたことも幸いし、1960年の独立以来、国は最も経済的に潤った時代を迎えることになった。

ところがである。石油の世界的な価格の下落が起こった。1985～86年には石油価格は60%以上も下落したのである。石油に依存していた国家収入は大打撃を受け、将来的な石油収入を担保にし対外借金が少しずつ膨れ上がっていった。

1984年、コンゴ労働党はサス＝ンゲソ大統領の再任を決定し、彼は新たに5年間政権を担うことになる。対外的な負債を軽減するために、独占的な国の経済を緩和し、社会主義路線から少しずつフランスなど西側諸国に近づくように切り替えていく。ただ、国内では公職の汚職が蔓延し、経済危機で奨学金が停まってしまったことで学生の反対運動など、すこしずつ政権に対する批判が高まっていく時代でもあった。1986年には街の映画館や空港でテロ騒動などが起きた。その一方で、サス＝ンゲソ大統領はアフリカ統一連合 (l'Organisation de l'unité africaine) の議長として選出され、当時アパルトヘイト下にあった南アフリカのネルソン・マンデラ氏の釈放に向けて奔走し、国際舞台でも頭角を表していった。

1989年7月、彼はさらに党の総会で選出され、さらに5年間の政権が約束された。だが、世界的な動きのなかで、彼はその任期を全うしないで政権の座から降りることになる。それはベルリンの壁の崩壊から始まる共産主義国家の消滅と連動した動きで、単一政党制から複数政党制への大転換であった。

2021年の大統領選挙は、90年代に複数政党制が導入されてから4回目となる。大統領選挙が行われるたびに内戦に陥るような国が多いなかで、平和裏に選挙が行われたことは評価できる。ただ、複数政党制が確立されたとはいえ、長期にわたって同じ政権が続いていることも事実である。コロナの病床からコレラ氏は、酸素吸入器を外して「国民よ、変化のためにみんな投票してくれ。私も戦う。みんなも戦ってほしい」と呼びかけた。だが、結果が分かっている選挙はそれほど盛り上がらなかったのかもしれない。彼が息を引き取ったのは、大統領選挙の投票箱が閉じられた数時間後だった。